

展示品一覧

次の3鋪は、第4次測量までの成果をまとめた「日本東半部沿海地図」の大幅で、文化元年8月1日に幕府に提出し、9月6日將軍家齊の上覧を受けた上呈図の伊能家控図である。

○「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第七〈自成行／至小松原〉」（静岡県西部）

[国宝：地図・絵図類 番号21、文化元年、縮尺36,000分の1]

第4次測量で、享和3（1803）年3月21日に成行村（静岡県掛川市）を出立してから、28日の小松原村（愛知県豊橋市）までの測量成果であり、主に静岡県西半が描かれている。ただし、この大幅は「海浜浪打際通り」（『測量日記』享和3年3月24日）を測量したものであるため、海岸線だけで東海道は描かれていない。また浜名湖岸も測量されていないので、浜名湖北半や気賀街道のあたりは大和絵特有の「すやり霞」で処理されている。

○「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第八〈自小松原／至上野間〉」（三河湾周辺）

[国宝：地図・絵図類 番号22、文化元年、縮尺36,000分の1]

享和3年3月28日の小松原村から4月29日の上野間村（愛知県知多郡美浜町）までの海岸測量の成果であり、主に渥美半島、三河湾周辺、知多半島南部が描かれている。この大幅で目を引くのは、三河湾奥に突出した砂嘴「水中洲」である。この地域については、『会報』第69号の「伊能図の旅」に、星埜由尚氏による詳細な解説がある。



○「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第九〈自上野間／至起〉」（知多半島北半～名古屋）

[国宝：地図・絵図類 番号23、文化元年、縮尺36,000分の1]

享和3年4月29日の小松原村から5月14日の起宿（愛知県一宮市）までの海岸測量の成果であり、知多半島の北半の両岸と伊勢湾奥、熱田、名古屋等が描かれている。4月29日と5月1日に宿泊したのが小鈴ヶ谷村の「止宿酒造人にて盛田久左衛門」である。ソニーの創業者・盛田昭夫の実家である。5月6日には「五ッ頃熱田宿出立。量程車にて測る。四ッ頃に名護屋城下玉屋に着」とあり、小田原、駿府、金沢とともに量程車を使用した稀な例である。

○「気賀街道〈自浜松／至長楽村〉首」

○「気賀街道〈自長楽村／至御油〉尾」

[国宝：地図・絵図類 番号 83・84、文化6年、縮尺 36,000 分の 1]

伊能忠敬は文化6年1月18日第6次測量から帰着し、7月25日第6次測量結果の地図を上呈した。この2鋪は第6次四国測量の往路、文化5年2月6日に浜松を出立してから、14日の御油宿（愛知県豊橋市）で東海道に合流するまでの、浜名湖北側を迂回する気賀街道の測量結果だけを反映した大図である。そのため気賀街道の測線のみであり、第5次測量の往路で測量した浜名湖は全く描かれていない。浜松や御油で接続する東海道も描かれていない。またコンパスローズもなく他図と接続することも想定していない大図である。展示では気賀の関所の北東部には、「井伊谷はこの辺り！」という説明板が置かれている。



伊能忠敬記念館では、1年前の収蔵品展では大図「越後街道図第五〈自上田／至関山〉」が展示され、真田丸の舞台となった真田、上田、松代を紹介していた。今年は井伊谷の紹介である。

問題は来年の「西郷どん」である。伊能忠敬記念館の伊能図のほとんどが東日本である。しかし、鹿児島県の下図や亀絵図は残存しているので、東京国立博物館や京都大学の中図や大図と、記念館の錦江湾の広域下図を並べて見てみたいものである。記念館の学芸員諸氏の創意工夫に期待する。

○「東海道・北陸道・東山道沿海図」（中図）

[国宝：地図・絵図類 番号9、文化元年、縮尺 216,000 分の 1、194×229cm]

文化元年の「日本東半分沿海地図」の中図の副本である。範囲は名古屋ー敦賀以東で磐梯山ー寺泊以南である。第5次測量以前のもので沼津以西の東海道は描かれていない。中度の経線は江戸である。常設展示の国宝番号4の中図のレプリカと同一である。

○「自出雲国意宇郡下来海村至石見国安濃郡仙山村下図」（出雲地方の下図）

[国宝：地図・絵図類 番号341、縮尺 36,000 分の 1]

79.5cm×143.1 という広域下図で、描かれている範囲は、宍道湖の西半分から出雲平野をへて石見の国境あたりである。昨年夏の第84回収蔵品展で展示した広域下図の西側である。しかし、遠江・三河の大図が展示してあるだけに、出雲ではなく、浜名湖周辺の下図と大図を比較してみたいところである。「自遠江国敷知郡浜松宿至三河国額田郡岡村下図」（国宝 地図・絵図類番号 288）を所蔵しているだけに惜まれる。

○「伊能忠敬の書状」 [国宝：書状類 番号42]

忠敬が長女の妙薫に宛てた2月12日付の書状である。内容的に文化14年のものであろう。書状は、江戸亀島町の地図御用所で忠敬や内弟子、天文方下役衆の生活を支えた奉公人たちをめぐるものである。15、6才の娘を雇うのを断る理由として、「若娘ハ家内を取らし、家内も少し浮気ニ相成候」といい、若い娘を雇うくらいなら、「物忘と、膳椀茶碗等打破り」の「つる女」で間に合わせるといっているのである。この書状の翻刻は『伊能忠敬書状 千葉縣史料』62頁に所収。

○「一札之事（西国測量従事に付誓約書）」 [国宝：文書記録類 番号274]

文化6年に箱田良助が第7次（九州第1次）測量に参加したときの誓約書である。箱田良助は現在の岡山県福山市神辺町箱田の庄屋の細川園右衛門の次男として生まれ、村名から箱田姓を名乗った。17歳のとき江戸に出て伊能忠敬の弟子となり、測量と地図作製に貢献した。『会報』第9号の伊能陽子氏の訳文を紹介する。

一 札の事
一 良助がこの度お弟子にして頂き、西国方面の測量にお連れ下さることを感謝致します。お勤めの間は、権威を笠に着るようなこととはせず規則を守り、真面目に勤務いたします。また、酒や遊びなどは勿論、不品行なことは致しません。もし、お役に立たず、お気に入らないときは、どこでも解雇して下さい。万一、旅先で病死など致しましたら、その場に葬って頂いて結構です。そのほか、何事も規則通り、注意深くお勤めすることを、お誓い致します。

備後国安那郡箱田村
箱田良助 印

文化六巳歳八月
同人親
細川園右衛門 印

備中国小田郡大江村
親類 谷 東平 印

伊能勘解由殿

○「箱田園右衛門の書状」 [国宝：書状類 番号311]

文政4年11月23日付、箱田園右衛門から妙薫に宛てた書状である。伊能図完成ののち、箱田左太夫（良助から改名）は榎本家の御家人株を買い、榎本圓兵衛と改名して徒士となった。さらには勘定方となり旗本に累進した。かの榎本武揚は圓兵衛の次男である。書状は左太夫に養子の話があるので、持参金が急に入用になった場合には立替えて欲しいとの内容である。『会報』第27号の菅波寛氏の「内弟子・箱田良助の榎本家入籍事情」によれば、この時の御家人株は50両とのことである。

○「規矩元法町見弁疑」巻之一から五まで5冊 [国宝：典籍類 番号371～375]

今回展示された島田道桓の『規矩元法町見弁疑』は、享保19年の刊本5冊で、測量について問答形式で分かりやすく記したものである。規矩、町見はいずれも測量術のことである。將軍吉宗は、曆算書を積極的に輸入するとともに、新田開発を奨励したことから、享保年間には多くの測量技術書が出版された。忠敬はこのほかにも同様の測量技術書の『量地指南』の写本を所蔵している。

○「組立机」 [国宝：器具類 番号55]

木製の組立机である。右袖には引出しが3段あり、左袖は棚が2段で、左右ともに慳食蓋が付いている。天板、左右の袖の部分の3箇に分解できるので持運びが容易である。

○「携帯用磁石」 [国宝：器具類 番号50]

携帯用磁石で木製の台に着脱可能な真鍮製の方位盤がはめ込まれている。方位盤には十二支が刻まれている。